

劉玄德の異相

土田龍太郎

天下溷群雄爭霸の世にはふれさすらへしその末に、つひに炎漢の大統を紹ぎて昭烈皇帝とおくりな諡せられし劉備玄德のこと、本朝の士庶の弘く親しみ來れるは、元祿のころ湖南文山なるものの筆に成りし明の羅貫中の三國志義の和譯本なる通俗三國志の流布に負けへること少からざるにいたり。

さるは十七史廿二史などいはゆる正史の數に入りぬる三國志にては、劉備のこと帝紀にはあらで蜀書先主傳といへるところに載りたるは、撰者なりし陳壽すでに晉に仕へゐたりしうへは、司馬氏に國祚を禪りし魏を正統にすゑ、蜀をさして僞朝と云はではすむまじきゆゑなり。

三國志卷三十二蜀先主傳第二にて陳壽、蜀先主劉備の人となり左のごとくに敘べたり。先主不甚樂讀書、喜狗馬音樂美衣服、身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳、少語言、善下人、喜怒不形於色。

毛宗崗本三國志演義第一回にて羅漢中の劉玄德の體貌を説くことまた左の如くなれば、陳壽の記せるところとさしも距らずと云ふをうべし。

先得身長八尺、兩耳垂肩、雙手過膝、目能自顧其耳、面如冠玉、脣若塗脂。

ここにも劉備の耳朵長きことを云へれど、演義第三十六回にては、河北の袁紹、大耳賊焉敢如此と云ひて劉備を罵れるところあり。

ここにいかにも心つくべきは、垂手下膝、顧自見其耳と云へるところなれども、劉玄德まことのかかる異相を具へたりしやいなや、いぶかしきかたさらになしとは思ふべからず。

佛陀もしは轉輪聖王たるべく定まりしもの、生れながら三十二大相を具ふと釋氏の經論に説けれど、第八相なる手過膝相とは直立して伸ばす手の膝を過ぐることにはかならず。さらにまた佛陀の色身に認むべき八十種好を數ふることありて、第四十二種好は耳厚大修長にして輪埵成就せること、第四十三種好は兩耳綺麗齊平にして衆過を離れたるさまを指せり。かかる佛の特相、玄德の具へたるなる長臂と大耳にさも似たるは、陳壽ただしばらく浮屠の所説に據りて玄德の外貌を記せしゆゑにて、蜀の先主まことにかかる異相を具へしにてはあらずと唱ふる物識人、今の世に少からざるめり。

釋氏の教法すでに後漢代に西土より傳はりぬるは疑ひなけれど、漢人の薙髮して比丘になれるはやや後れて魏の朱士行に生まれりとせば、三國の士民の間に佛法すでにあまねく弘まりたりとこそは思ひがたけれ、西域僧の布教翻經のいとなみのすでにめざましかりし

にまかせて、吳魏の地の顯貴のものはや三寶に歸依せしもの少まれならざりしにたり。かかる例、蜀には定かにえ辿りがたけれども、今に遺れる造佛の跡なきにあらねば、かの國の人士、佛身の相好のこといまだ知らざりきとはなかなか思ふまじきにこそ。

されば劉玄德につきて垂手下膝、顧自見其耳と云へるはまことならず、釋家の談義に泥めりしともがらのおのがさかしらにまかせて佛身の相好に藉りて蜀先主の體貌のただならざりしを示さむとはかれりしにすぎずと云ひてやみなむはむべたやすからめども、陳壽の敘ぶるところうつたへに空言なりともはた定めがたければ、いかにともせむすべ知らにおぼつかなきことよなし。

およそ陳壽の筆になりし紀傳につきてなにくれのことどもつばらに勘へむとせば、晉書卷八十二に載れる陳壽傳せめて一たびけみ閱せであるべからぬは云はずともしるかるべし。

この晉書本傳、初に

陳壽字承祚巴蜀安漢人也。

と曰ひ、未つかたには、晉の元康七年にみまかりしとき齡六十五なりしこと記せれば、この陳壽もと蜀人にして後主の建興十一年に生れしにまぎれなきなり。

陳壽の父のみまかりしは、おほかたかの宦官黃皓の國政專斷の始まれる景耀三年をさしも降らぬころほひにてもありぬべけれども、そはいかにてもあれ、晉書本傳にて、この父のこと言少なに述ぶること左の如し。

壽父爲馬謖參軍、謖爲諸葛亮所誅、壽父亦坐被髡。

街亭にて布陣を誤りて一敗地に塗れし馬謖を諸葛亮の涙を揮ひて斬りしこと、演義第九十六回到語れることいとつばらなれば、わが國にても知らぬものとは稀なるべし。このとき馬謖の幕下にありし陳壽の父また責を負ひて罪なはれつひに頭髮を除かれしこといとむりなしとや云ひつべからむ。

この人名さへ知られず、馬謖の參軍たりしことのほか官歴も明かならねど、街亭の敗衄の昭烈帝崩殂より隔れることわづか六年にすぎねば、劉玄德の世にありしころその下に長く仕へゐたりしことばかりは疑ふべくもあらず。先主にまのあたりに向ひたりしことありやなしやこそ定かならね、はるかに仰ぎ見るをりたえてなかりきとはえしも思はれず。さらに陳壽なほ若くて洛陽に遷り住まざりしころ、蜀先主に臣事してその容貌をまぢかに見知れるともがら、おのが父のみにもあらず、親族朋友の間にこころ生き残りしにまぎれなければ、陳壽の劉玄德の眞容を聞き知らでやみぬることわり、はたことさらにいはり記さむゆゑよしありけむとしも思はれず。よしやいつはり記さむとほりすとも、さはいしもなしがたきよろづのこのさまなりけむこと思ひはかるにたへたり。されば陳壽の劉備玄德の異相を述べて、垂手下膝、顧見其耳と云へるところ、佛身の相好に擬へし空言にてはあらず、蜀先主のうつつのありさまをなほ見知りたる蜀人より傳へ聞きしままに記せるにほぼまぎれなしといふべし。

(令和五年十一月二十七日受附)